

## 黙示録14章「主イエスの逆転の勝利」

### 1A 贖われた14万4千人 1-5

1B 新しい歌 1-3

2B 童貞 4-5

### 2A 神の激しい怒り 6-20

1B 中空を飛ぶ御使い 6-13

1C 永遠の福音 6-7

2C 大バビロンの倒壊 8

3C 火と硫黄の苦しみ 9-13

### 3A 人の子の刈り取り 14-20

1B 実った穀物 14-16

2B 酒ぶねから出る血 17-20

## 本文

黙示録 14 章の学びをします。私たちは 13 章において、獣の国について読みました。ダニエルに啓示された、七十週の期間の最後の週の半ば、獣が致命的な傷を負ったけれども、それが直ります。彼は底知れぬ所から出て来て、悪魔からその力と権威と位が与えられました。そして、偽預言者も現れます。彼は反キリストの持っている力を人の前で見せて、獣を拝ませます。神の宮の至聖所で反キリストは自分が神だと言い、そしてその偽預言者が彼を神として拝ませるのです。なんと獣の像を造って、その像に物を言わせたりします。そして獣の像を拝まない者を殺すのです。さらに、右の手か額に、獣の名の数字の刻印を受けさせて、受ける者は売り買いができません。

その数字は、六百六十六でした。六は人間の数字であり、神の数字、七から一つ少ないです。完全ではないもの、ほとんど完全であるけれども、完全ではないものを拝む、これが欺きの始まりです。神は、全き義を与え、全き平安を与え、全き愛を与え、私たちを完全に救われます。しかし、完全を与えられる神を受け入れたくないとするとき、人を称賛します。そこに反キリストの欺きを信じるようにされていくのです。

### 1A 贖われた14万4千人 1-5

13 章まで読めば、まるで悪魔が勝利し、反キリストが勝利したかのように見えます。しかし、神は余裕をもって勝利しておられます。反逆している者たちを見て、「天の御座に着いておられる方はあざ笑う。主はその者どもをあざけられる。(詩篇 2:4)」のです。14 章は、神とキリストが勝利しておられる姿、そして 15 章以降で神が地上に怒りを注がれる序幕、予告編とも言うべき幻を見せておられます。

## 1B 新しい歌 1-3

1 また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあった。

黙示録で新たな場面、新たな幻に入る時の、「私は見た。見よ。」という注意喚起から始まります。そして、「小羊がシオンの山の上に立っていた。」とあります。黙示録で、私たちの主が「小羊」と呼ばれています。これはもちろん、私たちが愛し、私たちのために血を流して罪から解放してくださったことを示す言葉です。そして、「シオンの山の上に立っていた」とあるのですが、これは既に主イエス・キリストが、再臨されてエルサレムの山に立たれたことを示す言葉であります。時は一挙に、地上に再臨して神の国を始めようとしているイエス様の姿を示しています。

シオンの山とは、エルサレムの町を構成するいくつかの山の一つです。イスラエルの地図を見ますと、その国の中心部は山々が南北に連なっており、エルサレムもいくつかの山が連なっています。アブラハムがイサクを捧げようとしたモリヤの山、その南にダビデがエブス人から奪い取ったシオンの要害があります。そこがシオンの山です。けれども、シオンはエルサレム全体をしばしば指します。使徒の働き 1 章において、イエス様はオリーブ山から天に昇られました。弟子たちが天を見上げていると、「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。(1:11)」と言いましたね。イエス様が再び戻られる時に、オリーブ山の上に立たれます。そして地殻変動が起こります。「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。(ゼカリヤ 14:4)」そして主は、エルサレムを最も高い山として、そこにイエス様が王として君臨されます。詩篇二篇 6 節には、「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」とあります。詩篇 48:2 には、「高嶺の麗しさは、全地の喜び。北の端なるシオンの山は大王の都。」とあります。そして、イザヤ書 2 章には、このシオンから主が教えを垂れるので、世界の国々が集まって来ることを預言しています。「多くの民が来て言う。『さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてください。私たちはその小道を歩もう。』それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。(2:3)」主ご自身によって教えを聞ける、シオンの山に集える日が楽しみです。

そこに、「また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあった。」とあります。小羊と共に、とありますから、親しい関係、同じように共に統べ治める関係を表していますね。彼らは、7 章に出て来た 14 万 4 千人のイスラエル十二部族の子孫たちです。彼らの特徴は、「神の印が押されている」ことでした。彼らに印を押すまでは、天使たちが木や海にどんな害も加えてはいけないと命じられていました。患難時代、最後の第七十週が始まった時に、神が彼らにご自身とキリストの名を記しておられたのです。彼らが主の所有の

ものであることを示しています。

この幻は確実に、獣の国おける獣の名前の刻印を意識したものです。反キリストと偽預言者、そしてその背後にいる悪魔は、神の国の物真似をして、自分たちに属する者たちを作るべく、六百六十六の数字を示す名前を押させたのですが、主ご自身は14万4千人に神とご自身の印を押しおられ、彼らを勝利者として認定しておられたのです。ですから、大患難も通り過ぎ、最後まで害を受けず、御国の到来の時に救われている姿を見せています。聖書には、水の中、火の中にあっても、それでも救われる人々の姿を証しています。水の中を通ったノアの家族、八人は、神の裁きであった洪水を通して救われました。ダニエルの友人三人は、ネブカデネザルによる燃える火の炉に投げ込まれても、それでも害を受けることなく救われました。

2 私は天からの声を聞いた。大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった。3 彼らは、御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、新しい歌を歌った。しかし地上から贖われた十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかった。

「天からの声」です。今、小羊がシオンの山に立っておられるのですが、それは天から降りてこられたのと同じです。ちょうど、シナイ山に主が降りてこられたように、主イエスが天からシオンの山に降りてこられたので、天にあるものが地上に近づいたようになっています。イエス様がパトモス島にいるヨハネに現れた時に、「その声は大水のようであった」とありました(1:15)。エゼキエル1章24節には、主の御座のそばにいるケルビムが、そのような音を立てているのを見ます(1:24)。そして、声が聞こえたのですが、それが「立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のよう」というのですが、立琴と言えば、ダビデが少年の時から弾いていた楽器です。詩篇には、立琴をもって主をほめたたえることが勧められています。「詩篇 144:9 神よ。あなたに、私は新しい歌を歌い、十弦の琴をもってあなたに、ほめ歌を歌います。」そして、神殿での礼拝に、立琴をも含めた主への賛美を導入させています。「1歴代 15:16 ここに、ダビデはレビ人のつかさたちに、彼らの同族の者たちを十弦の琴、立琴、シンバルなどの楽器を使う歌うたいとして立て、喜びの声をあげて歌わせるよう命じた。」なぜ、そんなに立琴なのか？それは天の音色だからです。天において、立琴のような音で、新しい歌がうたわれます。

そして、「彼らは、御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、新しい歌を歌った。」とありますね、天の神の御座にるのが、これら四つの生き物と長老たちでした。つまり、まさに今、天が降りて来て、彼らのところに御座が置かれているのです。そして、「新しい歌」ですが、これは主との親しい関係、新たにされる関係を表していますね。昔、ヒッピーたちがイエス様を信じて行った時、自分たちから出て来る思い、歌を、そのまま自分の持っているギターで歌にしていきました。新しい歌です。しかも、「十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかった」とあ

ります。彼らと主が持っているような関係でなければ、歌うことができないような特別な歌であったようです。

## 2B 童貞 4-5

4 彼らは女によって汚されたことのない人々である。彼らは童貞なのである。彼らは、小羊が行く所には、どこにでもついて行く。彼らは、神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。

ここの「童貞」は、14万4千人の人たちが神に対して貞潔を守っていることを表しています。純潔についての比喩は、例えば、イザヤ書 37 章 22 節に、「処女であるシオンの娘」とイスラエルが表現されています。13 章にて、全世界のすべての住民に、獣の刻印を押されるという強制が行なわれたのを見ました。非常に汚れた行為ですが、14万4千人はこれらの強制をも受けずに、汚されなかったと言えます。

そして、「彼らは、小羊が行く所には、どこにでもついて行く。」と言っていますね。これは、彼らが主に対して忠実であることを示しています。イエス様が弟子たちに言われていたことを実践しています。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。(マタイ 16:24)」「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。(ヨハネ 10:27)」「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。(ヨハネ 12:26)」

そして、「彼らは、神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。」という言葉ですが、「初穂」は、レビ記 23 章に出てくる言葉です。「初穂の祭り」というものが、過越の祭りの三日目に行なわれます。大麦の収穫があるとき、まず初めに主におささげするというのが、その主旨です。それから 50 日後に五旬節、ペンテコステがありますが、これは小麦の初穂を主にささげる祭りです。ですから初穂は、これからの収穫を予告するものであり、贖われた者の初穂ということは、これから 14万4千人のほかに、数多くのイスラエル人たちが贖われるという意味です。

神は、イスラエルを見捨てられていないというのは、旧約聖書に数多く書かれている預言であり、そしてパウロが、霊的真理としてはっきりと宣言している事実です。イスラエルが見捨てられたことになるのか？という問いに、「絶対にそんなことはありません」とローマ 11 章 1 節で答えています。そしてパウロは、異邦人の完成が終わったらイスラエルが救われる、と預言しています。患難時代に入ってから、14万4千人が神のしもべとなりました。そして 11 章で、二人の証人によって、エルサレムに住む人々が神をあがめ、イスラエル人の間にイエスを信じる人たちが現われ始めます。

そして、荒野に逃げたイスラエル人たちは、メシヤが戻って来られるのを見て、イエスこそメシヤであることを知り、世界中のイスラエル人が、イエスがメシヤであることを知ります。このように、イスラエルの救いの初穂として、14万4千人が立てられるのです。

5 彼らの口には偽りがなかった。彼らは傷のない者である。

主は、偽りのない口、真実を言う口を願われます。「詩篇 51:6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。」「ゼカリヤ 8:16 これがあなたがたのしなければならないことだ。互いに真実を語り、あなたがたの町囲みのうちで、真実と平和のさばきを行なえ。」そして、「傷のない者である」ということですが、旧約の律法の中で定められているものであり、神にささげる動物のいけにえは、傷があるものは受け入れられませんでした。足が骨折している羊は、主は受け入れられませんでした。傷や欠陥があってはならないのです。私たちクリスチャンは、傷もしみもない、小羊のようなキリストの尊い血潮によって贖い出されたと第一ペテロ 1章 19節に書いてあります。そしてキリスト者自身が、傷のない者とされることが、祈られ、約束されています。「また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。(1テサロニケ 3:13)」

## **2A 神の激しい怒り 6-20**

### **1B 中空を飛ぶ御使い 6-13**

こうして、獣の国の中においても、14万4千人は汚されることなく、しかも生き残っていることができます。主のあかしは完全に途絶えることはありませんでした。主の勝利です。そこで次に、これから起こる神の激しい怒りのさばきを予告する御使いたちが登場します。

### **1C 永遠の福音 6-7**

6 また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。7 彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

御使いが中天を飛んでいます。以前、第五の御使いのラツパ、第六と第七の御使いのラツパが吹き鳴らされる前に、「わざわざが来る、わざわざが来る、わざわざが来る」と叫んだ、中空を飛んでいたわしがいました。その後に三つのわざわざが下ったのですが(8:13)、同じように御使いは、これから起こることを予告しています。主の地上に下される御怒りが強調されています。

そしてこの御使いは、なんと永遠の福音を携えていると言っています。主が、患難期の後半に



入っていくのにあたって、最後の機会を地上に住むあらゆる人々に与えておられるのです。なぜ御使いなのか？一つに、主の証しをする人が極限にまで少なくされているということでしょう。教会は携挙され、地上で主を信じる聖徒たちは殉教します。そして今、残された者たちも獣の印を受けるのを拒むので間違いなく殺されていきます。それでも主は、御使いを遣わして福音を伝えさせるのです。「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされて、それから終わりの日が来ます。(マタイ 24:14)」とイエス様が言われました。「イスラエルの一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであって、こうしてイスラエルはみな救われる、ということです。(ローマ 11:25-26)」とあります。主は宣教者が枯渇していても、この御心を行なうために御使いを使われるということです。

そして福音の内容は、「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」であります。神をあがめなさい、神の裁きが来た、そして創造者を礼拝しなさい、というのは、獣の国においては偶像礼拝をさせられているからです。私たちの根本、根源である方であるキリスト(黙示 3:14)を退けて、自分たちでやっていけるのだとしたのが罪の元々の姿です。そこで、あなたの息さえも神が造られた、この方に頼り、この方が神であることをみとめ、あがめなさい、と呼びかけているのです。

## 2C 大バビロンの倒壊 8

8 また、第二の、別の御使いが続いてやって来て、言った。「大バビロンは倒れた。倒れた。激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」

この箇所から黙示録の中で大きなテーマの一つになっている「バビロン」という町が登場します。16章の最後のところに、大バビロンが倒れることが再び書かれており、そして17章と18章にて、長い紙面を割いて、主はヨハネにバビロンの崩壊について啓示を与えておられます。19章にて、主が地上に再臨される場面が出てくるのですから、大バビロンの存在は靈的に非常に大きな意味を持っています。

バビロンは、聖書の中において、イスラエルとエルサレムの町が滅ぼされ、ユダヤ人を捕囚の民とした、ネブカデネザル王による国として登場します。けれども、その前からバビロンは、神のご計画の中では創世記のところから登場しています。創世記10章にて、ニムロデという人物が最初の権力者になったことが書かれていますが、彼は神に反抗する権力者でした。シヌアルの地で町々を建てたことが書かれていますが、そこはバビロンの地域です。実はイザヤ書によると、バビロンに対する預言の中で、天地創造を神が行なわれる前に、ルシファーが天から墮落して悪魔になったことが預言されており、エデンの園にて蛇として現われるのですが、そこもバビロンの地です。さらに、人々が地に満ちるように、と主は命じられていたのに、一つのところに集まって、町を建てて、塔を建てて、天にまで届き、自分の名をあげようとしたのはバビロンの地です。主は言葉をばらば

らにされましたが、それは強制的に彼らが地上に散らばっていき、そこでへりくだった生活を送るようになるためでした。私たちは、言葉が一つであれば本当に便利なのだと思いますが、もし一つであれば、神に反抗し、自らを神にしようとする動きを一致して行なってしまうことでしょう。

そしてこの町を首都として、ネブカデネザルが人類の歴史において初めて、世界帝国を築きました。そしてバビロンが、イスラエルとエルサレムの町を滅ぼすために主に用いられました。このように、バビロンは、相集まって神に反抗して、自分たちを神にしようとする動きの代表格であります。このことから私たちは、人間を中心にして世界をまとめようとする動きを警戒しなければいけないことが分かります。経済統合、政治統合、そして宗教統合はまさにバビロンの動きです。ところでバビロン国は、ダニエル書に記録されているように、メディア・ペルシヤ国によって滅ぼされました。それでもバビロンの町は、世界経済や世界政治の中心地として、メディア・ペルシヤ帝国は用い続けましたし、またギリシヤのアレキサンダー大王も用い続けました。ローマに代わってから廃れはじめ、それからは廃墟の町となりました。このことが、イザヤ書 13-14 章と、エレミヤ書 50-51 章に克明に描かれています。今私たちが読んだ、「バビロンが倒れた。バビロンは倒れた。」という言葉は、イザヤ書 21 章 9 節からの引用です。

けれども、ヨハネが黙示録を書いているのは紀元 90 年代ですから、とつくの昔にバビロンは滅んでいないはずなのに、再び登場します。つまり、再び現われることになります。ゼカリヤ書に、終わりの時にシヌアルの地に「罪悪」と呼ばれている、エパ枳の中にいる女の姿がふたり出てきます。彼女たちはシヌアルの地で自分たちのための神殿が建てられる、との預言があります（ゼカリヤ 5:5-11）。そこで文字通り、今のイラクの地にバビロンが建設されるのか、あるいは、バビロンに代表された相集まって神に反抗する中心地が他に出来るのかは分かりませんが、いずれにしても終わりの時にバビロンが建て上げられるのです。

「激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた者。」ということですが、大バビロンの罪悪とは、「不品行」というぶどう酒をすべての国々に飲ませることです。覚えていますでしょうか、テアテラにある教会に、イゼベルと呼ばれる女預言者が教会の中におり、「わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。(2:20)」とイエスさまは叱責しておられます。彼女が実際の不品行を教会の指導者たちに行なわせていたのですが、それだけではなく、霊的姦淫つまりイエス様以外のものを拝ませる偶像礼拝を行なわせていた、と考えられます。したがってバビロンは、偽りの宗教制度でもあります。

### 3C 火と硫黄の苦しみ 9-13

9 また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、10 そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄と

で苦しめられる。

第三の御使いは、獣の国において獣に従い、拝んだ者たちに対する神の怒りを予告しています。バビロンが倒れた後に獣と偽預言者も滅びます。拒む聖徒たちは売り買いができず、餓死して死んだりするのでしょうか、刻印を受けた者たちのほうが、神によってさばかれて死ななければいけません。彼らは刻印を受けるときに、獣の像を拝んでいることが前提として書かれていることに注目してください。単に刻印を受けるのではなく、獣に対する忠誠をたとえ心がともなっていないでも行なっているのです。偶像礼拝は、心がともなっていないから形だけ行なうのなら大丈夫ではないのです。それは、偶像の背後にある悪霊を拝むことであり、私たちは形においてもそれを避けなければいけないことが分かります。

そしてここに「神の怒りのぶどう酒」という言葉が出てきました。詩篇には、「主の御手には、杯があり、よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒がある。主が、これを注ぎ出されると、この世の悪者どもは、こぞって、そのかすまで飲んで、飲み干してしまう。(75:8)」とあり、悪者が神のさばきを受けることが、ぶどう酒を飲むこととして表現されています。さらに、「神の怒り」という言葉ですが、ギリシヤ語には、怒りを意味する言葉として「スモス」と「オルゲー」があります。スモスは、ちょうど裁判官が犯罪人に刑の執行を行わなければいけない時のように、きわめて冷静に、理性的に考えて現わす怒りのことです。けれどもオルゲーは、熱情のこもった「これでもかあ！」と叫ぶような怒りの現われです。新約聖書ではスモースがよく使われますが、ここ黙示録にて、「神の激しい怒り」とか、「神の怒りのぶどう酒」ののところには、オルゲーが使われています。

主はあわれみ深く、情け深い神です。怒るにおそく、恵みとまことに富んでおられる方です(出エジプト 34:6)。主の寛容を考えると、気が遠くなるほどです。なぜここまで主は忍耐しておられるのか、なぜ悪者を滅ぼされないのか、と私たちは思ってしまいます。私たちは自分には憐れみを求め、人には裁きを求めますが、悪い人たちを見てそう思うのです。また、世の中を見ると、とことんまで悪くなっています。なぜ主はこのままにしておられるのか、と不思議に思うことがしばしばです。けれども主は、ご自分に似せて人をお造りになられたことをよく知っておられます。ご自分が自由意志を持っておられるように、人も自由意志をもっていなければいけません。ですから、人が善と悪のどちらかを選ぶ選択を与えなければいけません。そのため、主は彼らが自ら悔い改めて、ご自分に立ち返ることを忍耐して待っておられるのです。けれども、人の自由意志を神が尊重されるということは、彼らが自ら滅びを刈り取るという選択も尊重しなければいけません。自分たちの選択に対する責任を問われます。主は、行き着くところまで忍耐されて、それでも悔い改めないのであれば、これまでの行ないに応じた報いを行使されるのです。

「聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。」とあります。火と硫黄というのは、ゲヘナのことで、獣と偽預言者だけではなく、彼らに付き従った者たちもゲヘナに投げ込ま



れます。そしてただ火と硫黄の池にて苦しむだけではなく、「[聖なる御使いと小羊との前で](#)」苦しみます。恐ろしいですね。彼らは、絶えず小羊を認めながら生きなければいけません。自分たちが神の聖なる基準に照らし合わされて、それゆえに罪の定めと責めを絶えず意識しながら生きなければいけないのです。

11 そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。

苦しきは「永遠」に続きます。ここのギリシヤ語は「世々限りなく」という言葉が使われており、なんらぼかされていません。そして、彼らは「[昼も夜も休みを得](#)」ません。地獄というものを少し考えてみましょう。地獄とは、聖なる神が人々に対して、「わたしの基準を満たすために、自分自身で贖いをしなければいけない。」と要求するところです。今私たちは、「神もキリストも要らないよ。自分で何とかやっていけるから。」という言葉聞きますが、実際に、そのような人たちの願いをかなえてあげられるところです。自分の行ないによって神の基準に沿うように贖わせるところです。

けれども、もちろん、自分の行ないによって神の基準に達することはできません。その度に、自分を罪に定めなければいけません。「ああ、こういう良いことをしたつもりだったけれども、実に高慢であった。」など、自分が良いことを行なっているつもりが、聖なる神の前ではみな汚れた着物のようです。ですから、絶えず焦燥感の中で生きなければいけません。自分が神の基準に達成できないことに葛藤を覚えなければいけません。昼も夜も休みはないのです。いつまでも達成できませんから、永遠にこの苦しきは続くのです。イエスさまは、「[信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれています。\(ヨハネ 3:18\)](#)」と言われましたが、今、この地上にいる間に、神の恵みによる救いと、無代価で与えられる永遠のいのちを拒み、自分の行ないで生きていきたいのであれば、休みなき魂の中に留められるのです。

12 神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける聖徒たちの忍耐はここにある。」13 また私は、天からこう言っている声を聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。』」御霊も言われる。「しかり。彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行ないは彼らについて行くからである。」

主が自分たちを苦しめる者たちに対して復讐をしてくださることを知るとき、今の苦しみを甘んじて受けることができます。自分が仕返しをするのではなく、すべてのさばきを主にゆだねます。聖徒たちはことごとく殉教していきますが、その死によって神の怒りのぶどう酒を飲まずにすみます。15 章には、死後に、天において勝利の歌を歌っている殉教者たちの姿を見ることが出来ます。イエス様は、「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。(マタイ 10:28)」と

言われましたが、ほんとうに恐れなければいけないのは、人ではなく神です。

そして、ゲヘナにいる人々とは対照的に、天においてはすべての労苦から解放されて、休むことができます。ヘブル 4 章 11 節には、「私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め」とありますが、天国に入るときに、私たちに安息が与えられます。地上では労苦があります。それは愛の労苦です。そこで同じくヘブル書の 6 章 10 節にはこう書いてあります。「神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」愛が動機となって行なったその行ないは、この世では認められなくても、天では必ず覚えられています。そこで、この黙示録の箇所でも、「彼らの行ないは、彼らについて行くからである」とあります。

### **3A 人の子の刈り取り 14-20**

#### **1B 実った穀物 14-16**

14 また、私は見た。見よ。白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた。頭には金の冠をかぶり、手には鋭いかまを持っておられた。15 すると、もうひとりの御使いが聖所から出て来て、雲に乗っておられる方に向かって大声で叫んだ。「かまを入れて刈り取ってください。地の穀物は実ったので、取り入れる時が来ましたから。」16 そこで、雲に乗っておられる方が、地にかまを入れると地は刈り取られた。

この「見よ」という言葉は、1 節にも出てきました。小羊がシオンの山の上におられる光景でしたが、ここでまた、別の光景をヨハネは見ます。「白い雲」「人の子」との二つの言葉で、この方がイエス・キリストであり、地上に再臨される姿であることが分かります。「黙示 1:7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。」主は、金の冠を被っておられますが、黙示録 19 章に多くの王冠をかぶっておられる方として現れます。

そして手に鎌を持っておられますが、マタイの福音書 13 章における、天の御国の奥義について思い出してください。イエスさまが、たとえによって天の御国の奥義をお語りになりました。四つの種類の土と蒔かれた種についてのたとえがあります。その他に、毒麦と良い麦が同じ畑にまかれたたとえがありますが、主人は、「毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。(13:29-30)」と言いました。けれども、「収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょ。」と言っています。そしてこの意味を弟子たちにイエス様が解き明かされました。「人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行なう者たちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです。(41-42 節)」主が戻って来られる時に、地上にいる不法を行なっ

ている者どもが取り集められ、地獄に投げ込むということです。

興味深いのは、「地の穀物は実った」というところです。この直訳は、「収穫はかわいた」となっています。つまり、実って、実り過ぎて、水気を失い乾き始めた、ということです。主はここまで待って、悪者たちにも悔い改めるよう時間を延ばしておられましたが、もう収穫がかわくほどになっているので、今刈り取りを行なわれるのです。

## 2B 酒ぶねから出る血 17-20

17 また、もうひとりの御使いが、天の聖所から出て来たが、この御使いも、鋭いかまを持っていた。18 すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」

主が鋭い鎌を持っておられたのですが、もっと詳しく見ると、それを執行する御使いによって行われます。「火を支配する権威を持ったもうひとりの御使い」と言っていますが、たぶん、聖所にある香壇の火を地に投げつけたところの御使い、あるいは同じ働きをしている御使いでしょう(8:5)。収穫は、ぶどうの収穫でありました。そして大事なものは、「すでに熟している」ぶどうです。熟しすぎて、はちきれんばかりになっているぶどうです。「穀物がかわいた」と言っている表現と同じ主の忍耐を表しています。ここにも、主が最後の最後まで忍耐されている姿が現われています。

14:19 そこで御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めて、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れた。20 その酒ぶねは都の外で踏まれたが、血は、その酒ぶねから流れ出て、馬のくつわに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。

「酒ぶね」はぶどうの実を入れて、それを足で踏みつぶすことによってぶどう汁を集めます。今、「神の激しい怒りの大きな酒ぶね」とありますが、これは神が激しく怒られて、ご自分に歯向かう諸国の軍隊をことごとく打ち倒すことを意味しています。つまりハルマゲドンの戦いです。

そして、「都の外」とありますが、エルサレムの外ということです。そしてぶどう汁ではなく、文字通り血が酒ぶねから噴き出します。私たちは前回、ヨエル書の学びで、ヨシャパテの谷に、世界の軍隊が裁かれるところを読みました。「ヨエル 3:12-14 諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上って来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。かまを入れよ。刈り入れの時は熟した。来て、踏め。酒ぶねは満ち、石がめはあふれている。彼らの悪がひどいからだ。さばきの谷には、群集また群集。主の日がさばきの谷に近づくからだ。」

そして、「馬のくつわに届くほど」となっています。ものすごい高さです。そして、「千六百スタディ

オン」であります、296 kmにまで及びます。非常に生々しい光景ですが、主が諸国の軍隊を倒されることは、旧約聖書の預言書に、また黙示録 19 章に詳しく描かれています。

この距離は、イザヤ書の預言から何を意味しているかを推測することができます。イザヤ書 63 章をお開きください。1 節から 6 節までを読みます。「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」「正義を語り、救うに力強い者、それがわたした。」「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。わたしの心のうちに復讐の日があり、わたしの贖いの年が来たからだ。わたしは見回したが、だれも助ける者はなく、いぶかったが、だれもささえる者はいなかった。そこで、わたしの腕で救いをもたらし、わたしの憤りを、わたしのささえとした。わたしは、怒って国々の民を踏みつけ、憤って彼らを踏みつぶし、彼らの血のしたたりを地に流した。」

イエス様が戻ってこられるのは、1 節によると「ボツラ」であることが分かります。これは、現在のヨルダン国のペトラに位置する町です。覚えていますか、イスラエルが荒野に逃げて、ひと時、ふた時、半時の間、神に養われるのは、このボツラの地域です。反キリストがイスラエルを根絶やしにしようとして、ここに住む彼らのところにやってきて、また世界からハルマゲドンに集まってきた軍隊も、イスラエルを滅ぼそうとします。エルサレムの外の地域から、このヨルダンのボツラまでの距離が、だいたい 300km なのです。この一体に、世界の軍隊がイエスさまの攻撃によって滅び、血を流し死んでいくというのが、最後のシナリオなのです。そしてもちろん、ボツラへ向かったイエスさまは、戦われて、最後はエルサレムを救うために移動され、オリーブ山に立たれて地上に再び戻ってこられます。

こうして 14 章を見ましたが、獣の国に聖徒たちが負かされているように見えたが、実は主がすべてを掌握されて、獣の国にいる者どもの行ないに応じて報いられることが分かりました。私たちは、ますます自分たちでは理解できない世界の中に生きていますが、主は勝利をすでに収めておられます。